慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小山栄三著 新聞学
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.1 (1936. 1) ,p.151- 153
JaLC DOI	10.14991/001.19360101-0151
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360101-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

基礎理論を提供することも出來ないであらう。要するに既成の財政學說によつては、財政學が研究すべき經驗對象たる現代財政現象の正しい理解は必ずしも得られないかも知れない。殊に未曾有に大規模なる世界大戰に於ける戰時財政、大戰後に於ける其影響、或は未曾有に大規模にして深刻なる世界經濟恐慌と財政との相互作用等を其經驗對象の中に採り入れてない財政理論は、或は既に現實の財政現象と遊離したものとなつて居るかも知れない。財政學者は現實の財政現象を分析して、既成財政學說を再吟味すべきであらう。財政學には多くの研究問題が殘されて居る。經濟學研究者は現代財政の社會經濟的重要性の增大を認めて、財政の研究に一層多くの關心を持たれたい。最も手近なる好個の財政學書として、茲に前掲新刊書數種を紹介し、讀者に推奬する次第である。

小山榮三著　新聞學

加田哲二

新聞は、われわれが朝夕親んでゐるものである。單行本や雜誌を讀まぬ人は非常に多數であるが、新聞を讀まぬ人は、文字の解る人には寧ろ少いであらう。多くの人達は、單に一般的新聞を讀むのみならず、自己の職業を中心とした業界新聞や、政治・經濟・社會・思想の同一傾向・共鳴・同感のために、特殊新聞すら讀んでゐる。しかも、かゝる朝夕親んでゐる新聞でありながら、新聞に關する知識は案外貧弱の場合が多い。新聞は、世間の反映であるといふが、その反映は如何にして、反映せしめられるのか、新聞は社會の木鐸であるといふが、如何なる意義において、さういふことが出來るのか、これらの問題について、知識階級の人々といへども常識論以上に、知るところがないのである。

學問上、殊に、社會學においては、新聞の機能を重要視すべき理由を持つてゐる。われわれの世界的關聯は、今日の場合新聞を通じて意識化せらるゝのであるから、社會生活において、意識の組織化を問題とする人は、その最も多くの努力を新聞に向けてよい筈である。しかるに、わが國の社會學者はこれまで新聞を直接の對象として論ずることが極めて稀れであつた。ジャーナリズムの問題は、高々ジャーナリズム關係者の常識論を一歩も出てゐないや

うであり、社會學的考察は、尙ほ一層少ないのである。

かゝる狀態において、われわれは、小山榮三氏の大著「新聞學」に接することが出來たのは、われわれの大なる喜びである。「新聞學」は質量ともに、文字通りの大著である。本文四十七字詰十四行八四五頁の大著である。われわれは、かゝる大著が今日まで日本の新聞學界に現はれてゐないことを確言する。それは、絶後とはいひ得ないであらうが、空前の大著である。質の問題についていへば、それは、これまで多く出てゐる新聞製作の技術的解說でないことにおいて特色を持つてゐる。この點をも缺いてゐないが、更らに新聞全般に涉つた社會學的經濟學的分析及び綜合である。この點において、現在にいたるまでの日本新聞學界の何人の著述も、この大著の右に出づるものはない。かゝる大著であるから、多少難讀の個處のあることは、免れ難いところであるけれども、この書の飜讀によつて得るところは、新聞なる現象を通じて、社會そのものを如何に觀察すべきかといふことを敎へらるゝことである。いまこの大著の內容を一々紹介する餘白を持つてゐないから、著者が、この書の特徵として揭げてゐるところを記して、その一斑を讀者に紹介する。

「一　新聞現象の法則的關係を確立して、其の基礎的理論を構成しようとした。

二　新聞の一切の問題を解說して新聞の百科辭典的事實を具備しようとした。

三　新聞の社會的機能を分析して、その社會偉力の根據を明かにしようとした。

四　新聞に關する實證的資料――殊に未發表のものを出來るだけ網羅した。

五　現在までの總ての新聞學說を鳥瞰して其の總決算を與へようとした。

六　近代の新聞政策――殊に露西亞・獨逸・伊太利の新聞統制策を詳細に紹介した。

七　近代新聞の企業的構造及び技術的製作過程を叙述した。

八　新聞の史的發展を叙し、その文化史的意義を鮮明にしようとした。

九　世界各國の新聞の傾向及び現情勢を紹介して、其の國際的關係を明かにしようと努めた。」

かゝる著者の意圖は、本書の中に充分に現實せられたのであつて、新聞社會學に對して、顯著な貢獻をしたものといふことが出來る。統一的著述を完成することは極めて、困難であるが、著者はよく、この困難に打ち勝つて、新聞社會學の確立を期せられ、その目的を達したことは、われわれ同學の慶賀するところであると同時に、日本の社會學界が、この劃期的著述を期として、更らに現實的研究にその歩を進めることを期待するものである。（三省堂刊行、定價四圓五十錢）